
ごめんねの代わりに

木村よし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ごめんねの代わりに

【Nコード】

N1689N

【作者名】

木村よし

【あらすじ】

☆完結☆

地味で話下手な橘綾子。

自分が誰かを好きになることは、迷惑でしかない。

頭では分かっているのに、心が言うことを聞いてくれなくなって…！？

クラスの人気者に恋をした、平凡少女のピュアフルストーリー☆

佐伯くん（前書き）

他の小説が停滞中にも関わらず書き上げました。全九部の短編ですが、最後まで読んでいただけると嬉しいです。

また、『ごめんねの代わりに』のスピンオフ作品

『GO!GO!WITH☆YOU』

[http://pkcr.jp/novel/book.php?
novel_id=50145&guid=ON](http://pkcr.jp/novel/book.php?novel_id=50145&guid=ON)

を携帯サイトポケクリ（PCでも閲覧可能）にて連載中です。こちらは家庭教師コメディールとなっております。こちらもよければよろしく願います。

佐伯くん

私が好きになったら、その人は困っちゃうから。

私は可愛くないし、地味だし、明るくもないし、人見知りだし。そんな私に好かれても、その人は迷惑しちゃうだけだから。

だから、

私は人を好きになっちゃいけなくて。

それは痛いほど分っていて。

それなのに、私の心は言うことを聞いてくれなくなった。
貴方が助けてくれた、その時から。

■□ごめんねの代わりに□■

「橘、おはよ。」

「あ、お、おはよう。」

朝、廊下を歩いていると後ろから声をかけられた。
私の大好きな声。

「さ、佐伯くん、今日は早いね。」

「あー、うん。俺だってたまにはね。」

そう言ってニカッと笑ったのは、佐伯秀介くん。
私のクラスの人気者。

「橘は毎日早くて感心だけどさ。」

「そんな。た、ただ、遅刻するのが嫌なだけだから・・・」

何か言うたびに噛んでテンポの悪い私、橘綾子には、全く釣り合わない彼。

もちろん、彼氏と彼女なんて関係ではない。

友達・・・も危うくて、クラスメイト、知り合いがいいところ。

「うわあ、遅刻常習犯の俺には厳しいお言葉だわあ。お、教室着いた」

ガラリと佐伯くんが扉を開けると、教室にはまだ数人しか人がいない。

だけど、私と佐伯くんは教室に入るとそれぞれの席へと別れていった。

佐伯くんは、少し長めの茶髪で、一つボタンの外したシャツからはキラリとシルバーアクセが除いているような、決して真面目とはいえない生徒で。

だけど、別に授業をサボったりはしないし（朝の遅刻は別として）、体育だっていつも一生懸命で、先生やクラスの皆からとても好かれている。

成績のほうはあえて触れないけれど、容姿はキリリとした奥二重の目が印象的な端正な顔立ちで、勿論女子からはかなりモテる。

だから、私なんかとは絶対釣り合わない人で。

友達っていつでも違和感のあるような人で。

好きになったって、迷惑をかけるだけなのに。
なのに。

私の心が、言うことを聞いてくれません。

「あ、あの」

「あ？なんだ、橘かよ。」

それは、二ヶ月ほど前の放課後。

終礼が終わって、掃除当番に当たっている生徒はそれぞれ担当の教室へと別れていく。

私は教室の当番で、私と、もう一人の女子と、男子三人から成る五人の班だったけれど、私以外の四人は、箒を持ったまま窓際の辺りで固まって喋っていた。

だから、実質私一人で掃除をしているような状況で。

一人ではなかなか終わらないと思い、私は意を決して四人に話しかけた。

「そ、掃除・・・」

「は？なに？聞こえない。」

「掃除まだ終わらねえの？」

「掃除、一緒に、」

「なに。だから聞こえねえつつってんの。」

「話しかけてくんなよ、ブース」

最後の一言に、体がぎゅっと竦む。

もごもごと言いたい事のはっきりと言えない私は、彼らにとってつまらない存在で。

私の注意だって、やっぱり聞く耳ももってくれなくて。

諦めてまた一人で掃除に戻ろうとしたときだった。

「おい、お前らちゃんと掃除しろよ。橘、困ってんじゃん。」

予想外だった。

誰かが助けてくれるなんて。

「あ、なんだよ、佐伯じゃん。」

振り返ると、校内ではちょっとした有名な佐伯くんが立っていて。私は驚いて声も出なかった。

「なんだよ、じゃねえよ。おら、さっさと掃除しろって。松田に言いつけんぞ。」

「え、それは勘弁。松田はキツイって。」

「じゃあさっさと掃除しちやえよ。俺も手伝ってやるし。」

松田というのは生徒指導の先生で、かなりの熱血のため色々と面倒くさいと有名なのだ。

佐伯くんは言い終わると、教室の後ろに固められた机を一つずつ元の位置まで戻し始めた。
ぎいー。ぎいー。

佐伯くんが掃除を始めると、後の四人も渋々ながら一緒にやり始めてくれた。

なんとか無事に掃除を終えることができた。

「あ、あの」

鞆を持って教室を出ようとしている佐伯くんを思わず呼び止めた。

「ん？どうした、橘。」

「そ、掃除、あの、」

お礼を言いたい。

ただ、それだけなのに。

上手く、言葉が出てこなくて。

自分のつま先を見たままの私。

「て、手伝って、もらって、その、」

私の詰まり詰まりの言葉に、佐伯くんはもしかすると苛々してきているかもしれない。

顔をあげると、早くしろよって怒った目が、私を見ているかもしれない。

私は怖くなって、更には声すら出てこなくなってしまった。

「・・・」

どうしよう。

お礼……。

「橘、よかったら今日一緒に帰らない？」

え？

今、何て言ったの？

私は彼の言葉がわずかに信じられなくて、思わず顔を上げた。

そしたら、そこには怒っている目なんてなくて。

優しく笑っている佐伯くんの顔があつて。

「駅まで。一緒に帰ろう。」

私はコクンと頷いた。

その日から、私は佐伯くんと少しずつ喋るようになって。

廊下ですれ違っても挨拶したりするくらいは仲良くなって。

駅までは同じ道だった。

ホームは違ったから、家は全く正反対の方向だったけれど、駅までたまに一緒に帰ったりもした。

佐伯くんは本当に素敵な子だったから。

優しくて、明るくて、面白くて。

私が喋るのが下手なのを知っても、楽しい話を沢山してくれた。
相槌をうっただけだった私に、愛想もつかさず笑顔で話してくれた。

だから。

私の心が言うことを聞かなくなるのに、そんなに時間はかからなくて。

佐伯くんという引力は、私をどんどん引き付けていった。

眩しい夢

夢を見た。

それは、どんな内容のものだったか忘れてしまったけれど。
眩しい夢だった気がする。

眩しくて、

眩しくて、

寂しい夢だった気がする。

「あーやーこ。」

音楽の授業が終わって、まわりはがやがやと教室へと戻っていく。

「あ、佳世。」

「何ぼおっとしてんのよ。」

「あ、ご、ごめん。」

音楽の用意を抱えた幼馴染の佳世が傍に立っていて、私は慌てて教科書やノートをまとめた。

今日はなんだか変だった。

何故か何事にも集中でない。

お昼ごはんの時も、なかなか箸が進まない私に、佳世は加減なしにデコピンを食らわせてきたし。

ふと、夜に見た夢のことを思い出してしまう。

どんな内容だったかなんて覚えていないけれど、そのことが頭を過ぎると、さっきのようにぼおっとしてしまうのだ。

廊下に出ると、もう日が傾いてきていた。

十月に入ると、夏休みの長い昼が嘘のように一日が短くなっていく。

「もうすぐ中間テストだねー」

窓の外を見ながら佳世が言う。

「あ、う、うん。」

「勉強してる？」

「し、して、ない・・・」

中間テストのことは忘れていたわけではないけれど、まだ何も手を付けられていなかった。

「綾子、数学苦手じゃん。大丈夫なの？」

「・・・わ、わかん、な、い」

別に、文系科目が得意というわけでもないけど、数学は本当に駄目

だった。

なんというか、数字と文字の羅列が、生理的に受け付けない。

私の返答に、佳世はため息を一つ吐き出して、私の方を向いた。

「仕方ないなあー。今日スタバ寄ってから帰ろっか。」

「え?」

「抹茶フラペで数学教えてあげる。」

二つとわらった佳世の顔は、逆光でよく見えなかったけれど、

「う、うん!」

私は久しぶりに佳世と行くスタバに少し嬉しくなって、首を勢い良く縦に振った。

駅前ということもあって、スタバはいつもお客さんでいっぱいだ。今日もちろん例外ではなく、入ったときは満席で、少し待ってやっと二人分のカウンター席が空いた。

私と佳世はすぐにその席に荷物を置いて、私はお財布をもってレジへ行き、自分の分と佳世の分の抹茶フラペを買ってきた。

「ん。ありがとう。」

二人で並んで、座ると、そのスペースは少し狭かった。

「よし、じゃあ勉強しますかー。」

「う、うん。」

佳世は抹茶フラペを少し端へよけると、カウンターに数学のノートと問題集を広げた。

「はい、今から分りやすく説明してあげるからよく聞いてよ。数列の基本は綾子も・・・」

佳世がすらすらと説明していくのを、私は一生懸命聞こうとする。

「この問題は、」とか「このxに三を代入して、」とか。

確かに、分りやすい説明で、私でもなんとか理解していけたけれど。

カララン。

入り口の扉に付いた小さな鐘が鳴った。

その音はそんなに大きくないから、今までは全く聞こえなかったのに。

何故かその時だけ入り口の方を反射的に向いてしまった。

あ・・・。

そこには、違うクラスの男子二人と話しながら入ってきた佐伯くんがいて。

私の注意はもはや佳世の説明からは完璧に切り離されてしまった。

佐伯くんは私たちに気が付くことなく、カウンターとはレジを挟んで反対側のテーブル席の方へと行ってしまった。

話かけたかったな・・・。

「綾子！」

「は、はいっ！」

名前を呼ばれて慌てて佳世のほうを見ると、佳世はしかめっ面をしていて。

「あんた、私の説明をスルーするなんていい度胸してるじゃないの。」

「い、ごめ、」

「・・・佐伯？」

「え・・・」

予想外の発言に、私は思わず固まった。

「今、入ってきたでしょ。最近、綾子、佐伯と仲良いみたいだし。」

「な、仲良く、なんか・・・」

「話しかけにいかなくていいの？」

佳世は一旦ノートと問題集を閉じると、端にあった抹茶フラペを手に取りちゅーっと飲んだ。

「うえ。結構溶けてる。」

「あ、あの、」

「はい、一旦休憩中なんだから。挨拶くらいしておいで。」

そう言われてもなかなか席を立とうとしない私の背を、佳世は「ほら」と押した。

しぶしぶ歩き出す。

テーブル席はカウンター席よりも賑やかで、思わず足が竦んだ。ぐるりと見渡すと、一番奥のほうの四人掛けのテーブルに佐伯くんを発見して。

おそろおそろ近づく。

「ぎやはははは！まじかよ！」

「ウケるんですけど！松田！」

いきなり佐伯くんと一緒にいた二人が大声で笑い出して、びっくりとする。

私の苦手な、派手な男子。

私の足は、完全に止まってしまった。

「ちょ、お前ら、声デカいって・・・」

佐伯くんの慌てたような声が聞こえる。

あと少しなのに。
やっぱり私の足は前に進んでくれなくて。

「あつれー？ 秀介じゃん！？」

高い声と同時にドンッと身体を押される。

見ると、同じ制服を着た、知らない女の子が佐伯くんのほうに歩いていて。

「お、萌子じゃーん。今帰り？」

佐伯くんじゃない男子が応えた。

その女の子は少しお化粧をしていて、ストレートの髪がさらりと綺麗で。

佐伯くんたちのグループに入っていくのは、本当にごく自然で。

それは、なんだかとても眩しかった。

もう、戻ろう。

私は、今は場違いだから。

そう思って、くるりと方向を変えた。

一歩、一歩、佐伯くんたちから離れていく。

眩しかった。

すごく。

あの女の子も。

佐伯くんたち男の子も。

私には、遠い光のようで。
入って行っではいけない。
そんな、違う世界のように。

私も、もっと可愛かったらよかったのに。
そしたら、きっと今だって。

今だって・・・

「橘？」

呼ばれた名前に、びくりと止まる。

「橘、だよな？」

ゆっくりと後ろを振り返る。
うそ。

まさかね。

「やっぱり橘だ！」

嬉しそうに目を細めた佐伯くんが、こちらに歩いてきていた。

「あ・・・わた、し」

私を見つけて、佐伯くんから話しかけてきてくれて。
あの可愛い女の子もいるのに。

それが少し信じられなかった。

他の三人からはなんとも言えない視線を向けられ、私は慌てて下を向いた。

「どうしたの？」

「さ、佐伯くん、が、入ってくるの、見て、」

「うん。」

「その、あ、挨拶、した、くて、」

私の言葉を聞いて、佐伯くんは更に嬉しそうに笑った。

「まじで！わざわざ来てくれたんだ？」

「う、うん。」

迷惑、だったかな。

少し不安になったけど。

「ありがとう！」

佐伯くんがすごく嬉しそうで、私はここまで来て良かったと思った。

カウンターに戻ると、佳世に「遅い」と怒られ、私の分の抹茶フラペまで無くなっていたのは、今からあと少し後の話。

一人

朝のSHRがもうすぐ始まる。

あと三分くらい？

当然ほとんどの生徒が教室にいて、先生が来るのを待っている。

「橘。おはよ。」

ぎりぎりの時間に、佐伯くんは友達と話しながら教室に入ってきた。席に座っている私の肩をぽんと叩いてから自分の席へと歩いていく。

佐伯くんに話しかけてもらえたのはすごく嬉しいんだけど・・・。

斜め前の席を見る。

まだ、その席の主は来ていない。

白石佳世。

その席の主の名前。

小学校から仲の良い、私の幼馴染。

チャイムが鳴るのと同時に、私の携帯電話が制服のポケットの中で震えた。

こっそりと開いてみると、それはやっぱり佳世からのメールで。

【ごめん。熱が出て、今日は一日休みます。】

そう、あっさりと書かれていた。

私は空いたままの佳世の席をみる。

いつも一緒にいる佳世が休みなんて初めてで。

佳世は何をするにも一緒に。

というか、人見知りの激しい私は佳世くらいしか話せる友達がいなくて（佐伯くんは別）。

今日一日、どんよりとした不安を抱えて過ごさなきゃいけないみたいだ。

「はい！集まって！」

先生の声で、クラスの女子がぞろぞろと固まる。

今は体育の時間で、前には臍脂色のジャージを着た先生が立っている。

「今日からハンドボールをします。」

先生が言うと、皆が口々に不平を言い出した。

テニスがいい、とか。

バスケがいい、とか。

・・・私はもともと体育が苦手だから、どの競技も嫌なんだけど。

「静かに。まずはボールのパスから練習してもらいます。適当に二人ペアになって。」

適当にペアを作る。

その言葉に私はなんだか身体がギュッと固まってしまった。

周りはずぐにペアをつくっていく。

本当に一瞬でペアが出来上がっていく。

どうしよう。

今日は佳世がいない。

私、誰と組めばいいの。

「はい、ペアは組めましたか？」

先生がぐると見渡す。

その視線から逃れるように、私は体育座りした膝に顔を埋めて、更に小さくなった。

「余ってる人、いない？」

先生の質問に、私はおそろおそろ手をあげた。
ゆっくりと。

「あ、橘さん一人なのね。」

その言葉に、一斉に周りの視線が私に飛んでくるのが分った。

見ないで。

お願い、見ないで。

もう、どこかに穴を掘って逃げてしまいたかった。

「先生ー！あたしたち三人でやっちゃ駄目ですかー？」

「え？そこ三人なの？」

私とは少し離れたところから声がして、先生がそれに反応する。

「うん。ねえ、三人じゃ駄目？」

「丁度いいじゃない。橘さん一人だし、その一人が橘さんと組んで。」

え。

顔をあげて声のほうを見ると、あまり話したこともない近藤さんたちが三人立っていて。目が合うと、思い切り嫌な顔をされてしまった。

近藤さんは後ろを向くと、あとの二人に何かをコソコソと話し出して。

なんとなく、私のことを話しているんだろうなと思って、不安で唇をぎゅって噛んだ。

「はい、もう近藤さんと橘さん組んで。じゃあ適当に散らばって始めて。」

私が近藤さんに駆け寄ると、彼女はまだ文句を言っていた。私に気が付くと、また嫌そうに顔を歪めたので、私は小さく「ごめんね」と謝った。

ボールは近藤さんが持っていて、ボールがこちらに投げられた。

私はそれを目で追い、走る。

「あ・・・あ・・・」

ボールは私の横を擦り抜けて、一度バウンドすると、後ろへと転がっていった。

「ご、ごめ・・・」

私が謝ると、近藤さんは苛ついたように眉を寄せて、ふいと顔を逸らした。

私は慌ててボールをとり走る。

ボールを捕まえたとき、たまたま近くでパスをやっていた子がこちらを見ていた。

私は「ごめんね」と言って戻ろうとしたら、その子は、

「優子（近藤さんの名前）も災難だね。」

と、鼻で笑った。

私、また迷惑ばかりかけてる。

何も言い返せずに元の場所へと戻った。

もう、泣きたかった。

チャイムが鳴る。

先生が出て行く。教室内が一気に騒がしくなった。

体育で疲れて帰ってきてから四時間目を受けて、やっとお昼休み。皆が賑やかにご飯を食べ始める。

私は、今日は佳世が休みだから。

自分の席で一人でお弁当を広げた。

一人で食べるのは初めてで。

誰も私のことなんて見ていないのに、一緒に食べる人がいないということが、何故かとても惨めなことに思えて、顔を上げられなかった。

一口目を食べようとしたとき。

「あれ、橘って弁当派だったんだ？」

箸が止まる。

顔を上げると、楽しそうに笑う佐伯くと目が合った。

「あ、う、うん・・・」

一人でお弁当食べるところなんて見られなくなかったのに。私は恥ずかしさから、再び下を向いた。

「俺も今日弁当なんだ。一緒に食っていい？」

「え？」

「他のやつみんな学食でさ、俺、一緒に食べるやついなくて。駄目？」

佐伯くんが、お願い、と手を合わせてきて。

一緒に食べる人がいないなんて、そんなことありえないのに。私に気を使って言ってくれてるなんて、分りきったことなのに。

私は、「い、いいよ」としか、答えることができなかった。

「まじで！ありがと。」

そういうと、佐伯くんはコンビニのお弁当を席から持ってきて、私の前に座った。

お弁当って……。手作りじゃなかったんだ……。

「今日体育で何やった？」

ばかりとプラスチックの蓋をあけながら佐伯くんが話し出した。

「は、ハンドボー、ル」

「いいなー。男子は短距離でさ。俺は球技のほうがいいのに」

「そ、そうなんだ……」

「橘はさ、球技と陸上、どっちのが好き？」

「え、えっと・・・陸、上」

「まじかー。じゃあ今日入れ替わりたかったし」

「え、」

話すのは佐伯くんばかりで。

私は短く答えたり相槌を打つだけで、話を展開していくということができない。

お弁当も食べなくちゃいけないし。

口数が少ない私にも、佐伯くんは楽しそうに話し続けてくれた。

「ハンドボール、嫌い？」

「う、うん。」

「なんで？」

「え・・・あの、」

「あ、ボールが怖いとか？」

「う、うん」

「ボール怖いんだ？かわいいー」

か、かわいい！？

予想外のその言葉に、勿論免疫なんてあるはずもなく、私の顔がみ

るみる熱くなって行く。

「あれ、顔赤くない？橘？」

「あ、その、こ、これは、」

私は何もいえなくて、思わず下を向いてしまった。

そしたら、その頭にぽんと佐伯くんの手が置かれて。

「ボール怖いならさ、今度一緒にパスとか練習しような」

そう佐伯くんが言うのを聞くと、顔はますます熱くなって、嬉しくて。

そつと顔を上げた。

「あ、ありが、とう」

一緒に食べてくれて。

楽しい話をしてくれて。

私なんか笑顔を向けてくれて。

優しくしてくれて。

嬉しくて嬉しくて嬉しくて。

うつすらとはった涙の膜が、もうすぐで破れそうになった。

ケータイデシワ

それは突然のことだった。

「あ、そうだ。橘ってさ、携帯もってる？」

佐伯くんと一緒に帰っているとき。

丁度、校門をでた筋にある郵便ポストの前を通ったときだった。

「あ、う、うん。」

「お、どこの？俺エーユー。」

「わ、わたしも、エーユー。」

それまでは、今日も松田先生がある授業でキレたとかいう話を佐伯くんがしてくれていて。

急に思いついたように携帯の話題に変わったのだけれど。

「一緒じゃん！機種は？見せてもらっていい？」

私はポケットから携帯を取り出した。

私の携帯はW54Sで、もう今から二年くらい前の形のもの。

色はワインレッドだけど、ストラップは一つも付けていなくて、女の子らしさはあまりない。

「これってカメラの性能がいいやつだろ。俺もこれと迷ったんだけどさ。」

言いながら、今度は佐伯くんが携帯を取り出した。

正直そんなに機種には詳しくないからなんという形なのかはわからないけれど、彼のものも少し前のもののような気がする。

「俺、結構携帯落とすから、一応防水のにしたんだ。」

佐伯くんの携帯はシンプルな黒のもので、ストラップは一つだけ垂れている。

それは何かの羽を加工したようなもので、佐伯くんに似合ってお洒落だった。

「よかったら、メアドとか交換しない？」

「え・・・」

思っても見なかった提案。

私は一瞬信じられなくて、少し固まってしまった。

「あ、無理なら全然いいんだけど、」

「む、無理じゃ、ない！」

私の反応を見て少し困ったように眉を下げた佐伯くんは、素早く訂正する。

佐伯くんとメアド交換。

私には無理だと思っていたのに。

「ありがと。じゃあ俺から赤外線で送るわ。」

私と佐伯くんは、お互いの携帯電話をつき合わせてそれぞれのデータを交換した。

そのときに携帯をもつ私の手は、かすかに震えて。それを必死にばれないようにして。だけど胸の鼓動は速くなるばかりで。今、夢の中にいるんじゃないかって。そんなことを思ったりしながら。

データを交換する時間が、すごく長く感じられた。

「うし。ありがとう。」

「う、ううん。こ、こちらこそ・・・」

「あ、あとさ。」

佐伯くんはいいながら、携帯をなにやらいじりだした。

私は何をしているのかわからなくてじっと待っているだけだったけれど。

少しして、佐伯くんがストラップを取り外したのだとわかった。

「これ、よかったらやるよ。」

「え?」

「ストラップ、何も付けてないみたいだし。俺、同じのペンケースに付けてるからさ。」

私の前に突き出されたストラップ。

白に少しベージュがかかった羽が、ひらりと揺れる。

「で、でも」

受け取っていいのかな。
本当はすごく欲しいけど。
だけどやっぱり悪い気がしてしまっ

「いいから！もらって！」

どうしようか悩んでいる私の手をとると、佐伯くんは半ば無理矢理ストラップを握らせた。

「あ、あり、が、とう。」

「使い古しで悪いけど。」

違うよ。

佐伯くんが使っていたやつだから。

佐伯くんからもらったやつだから。

私はすごく嬉しいんだよ。

「じゃあまたメールするわ。」

「う、うん。」

気が付くと、もう駅に着いていて。

私はストラップを握り締めたまま、佐伯くんに手を振って別れた。

ホームに続く階段を降りる時でも、なんだかフワフワしていて。

目を閉じたら佐伯くんの笑った顔しか出てこなくて。

また、夢の中なのかなとか考えちゃったりして。

電車に乗ったら、早速貰ったストラップをつける。

正直、ワインレッドにそのストラップはあまり合っていないなかったけ

れど。

携帯の下で揺れる羽根がすごく嬉しくて。

私は最寄の駅に着くまで、ずっと眺めていた。

「綾子ちゃん、どうしたの。」

夜の七時過ぎ。

目の前には夕飯のハンバーグとサラダが並べられていて、私はちまちまとそれらを口に運んでいる。

私の横には弟の悠斗くんが、目の前にはお父さんが、その横にはお母さんが座っている。

「携帯電話、気になるの？」

「・・・ん」

お箸を咥えて頷く。

お母さんが言うように、今、私のハンバーグのお皿の横には、携帯電話がちよこんと置かれている。

「きよ、今日、あ、アドレス、交換して・・・」

「そう。よかったじゃないの。」

家に帰ってから、佐伯くんに「ストラップありがとう」とメールを送ってみた。

そしたらすぐに返信がきて、その後も少しメールのやりとりをした。

だけど、一時間ほど前から返信がなくなってしまった。

大した内容のメールなんて送っていないから、多分怒らしてしまったことはないと思うのだけれど。

気になってしまって、いつ返信がきても大丈夫のように、ずっと携帯を持ち歩いていた。

「ほら、綾子ちゃん、ご飯食べたらお風呂に入ってらっしゃい。」

携帯を開いては閉じ、開いては閉じを繰り返している私に、お母さんは少し困ったように言った。

さすがに携帯をお風呂に持って入ることはできないから、部屋に置いていった。

メール。

メール。

メール。

そのことばかりが気になってしまう。

湯船に浸かって目を閉じると、今日佐伯くんにメアドを聞かれたときの光景が浮かび上がった。

『橘ってさ、携帯もってる？』

『よかったら、メアドとか交換しない？』

『無理なら全然いいんだけど』

『ありがと。じゃあ俺から赤外線で送るわ』

震える手。

赤外線受信。

赤外線送信。

増えたデータ。

「佐伯秀介」。

『これ、よかったらやるよ』

『俺、同じのペンケースに付けてるからさ』

てことは、お揃いってこと？

『いいから！もらって！』

『使い古しで悪いけど』

あ、だめだ。

私は何故か鼻血が出そうになって、慌てて湯船から出た。

髪を乾かしてから部屋に戻ると、携帯が震えていた。
開くと、「着信アリ」の文字。

メールじゃなかったことに少しがっかりして、着信履歴を見る。

「え……。」

そこには「佐伯秀介」とあって。

私は気が付いたら佐伯くんの番号を押していた。

プルルルル、プルルルル。

『もしもし』

機械音が途切れると、低い声が鼓膜を叩いた。

「も、もしもし、あの、」

『あ、橘？』

「う、うん」

耳元で囁かれている錯覚に陥りそうになりながら、私は携帯を握り直した。

『ごめんな。携帯の電池切れちゃったから、家につくまでメールできなくてさ。』

「ぜ、全然、大、丈夫。ちゃ、着信、あった、から、」

『あ、それだけ伝えたくて電話までして。ほんとごめんな』

「う、ううん！あ、ありが、と、」

『じゃ、また明日』

「す、ストラップ！」

手元で羽根が揺れる。

『ん?』

「あ、ありが、とう。す、すごく、嬉し、かった、です。」

『んーん。喜んでもらってよかったです。じゃ、また明日な。』

「う、うん。」

『おやすみ』

そう言って、電話は切れた。

電話を耳から離すと、部屋の中はとても静かだった。
手が、少し汗ばんでいた。

おやすみ。
って言いたかったけれど、言えなかった。

なんだか「おやすみ」って言葉は、とても大人な関係のような気がしたから。

耳元で囁かれた「おやすみ」は、きっと私を眠りへと誘ってはくれない。

だって、

今こんなにもドキドキしているから。

私は、携帯を閉じてそっと枕元に置いた。

やっぱり、なかなか眠れそうにない。

クローバーとリス

「橘、頼みたいことがあるんだけど。」

四時間目の終わりのチャイムが鳴って、佳世ちゃんとお弁当を食べようとしている時だった。

振り返ると佐伯くんがいて、私の胸は密かにどきどきと駆け足になっ
ていく。

「あ、さ、佐伯くん。ど、どう、した、の？」

相変わらずどもる私を気にする風もなく、佐伯くんは軽く笑って言う。

「あ、うん。もし橘が明日暇ならなんだけど、プレゼントと一緒に
選んでもらいたくて。」

今日は金曜日だから、明日は土曜日なわけで。勿論学校はお休みで。

「プ、プレゼント？」

「そう。相手は女の子なんだけど、俺姉ちゃんとか妹とかいなくて
さ、正直女の子の好きそうなものとかわからなくて。」

「え、で、でも、私なんか・・・せ、センス悪い、し・・・」

「そんなことねえよ。俺は橘を選んで欲しいんだ。」

「で、でも・・・」

「頼むよ。橘。」

佐伯くんの目を見ると、当たり前だけどバッチリ視線が合っ
てしま

その目が少し真剣だったから。

「あ、わ、私で、よけれ、ば・・・」

勿論断れる筈も無く、私はコクリと頷いた。

「ありがとう！助かるよ。じゃあ明日の十一時に・・・」

嬉しそうに明日のことを話し始める佐伯くんをちらりと盗み見る。
どうして私なんだろう。

佐伯くんなら、他に誘える女の子なんて山ほどいるのに。
私なんかよりもずっと可愛くて、お洒落な・・・。

「じゃあそういうことで。また後でメールもしとくし。明日、よろしくな」

「う、うん。こちら、こそ。」

明日、どうしよう。

何を、着て行こう・・・。

十時五十五分。

私が待ち合わせの駅前に着いてから二十分弱。

少し早く着きすぎてしまったことに、ちよつと後悔。

洋服はいきなり可愛いものを買いにいけるはずもなく、いつも着ているねずみ色のパーカーにチェックのスカート。

足元はお気に入りのぺたんこパンプス。
可愛くもないけど、多分変でもないはず。地味だけど。

「橘！」

呼ばれて見ると、改札から佐伯くんが出てくるところだった。

「ごめんな、待ったよな？」

駆け寄ってくると、申し訳なさそうな声で言った。

「う、ううん！わ、私が早く、つ、着きすぎちゃっただけだから・・・」

「あーもーマジでごめん。」

「さ、佐伯くん、悪く、な、ない。」

早く着きすぎてしまったことに、再び後悔。今回は猛烈に。

「ち、遅刻、するのが、嫌だった、だけ、だから・・・」

私がそう言うと、佐伯くんは私の方を見た。

少し驚いたように目を大きくすると、次は急にくつくつと笑い出した。

「え、え？」

私は何がおかしかったのか分らなくて、焦りやら恥ずかしいやらで顔が紅くなっていくのを感じた。

「ごめん。いや、橘、前にもそうやって言ってたことあったなって

思ってたさ。」

「え？」

「朝、学校で。来るの早いとか、そういう話した時。」

そ、そうだっけ。

そう言われてみれば、そうだったかもしれない。

なんとなく思い出すと、なんだか私もおかしくなって。

私もくすくすと笑ってしまった。

私が笑い出すと、佐伯くんもまた笑って。

ああ、やっぱり私は佐伯くんが。

佐伯くんが好きだなあなんて。

そんな、馬鹿みたいなことを思って。

ちよっぴり寂しくなりながら、二人で並んで歩き出した。

ファストフード店で軽く昼食を済ませてから、私と佐伯くんは近くのビブレに入った。

中は広くて、明るい照明が真っ白な印象を与えた。

土曜日ということもあって、お客さんは結構多かった。

「ど、どんなのが、い、いいの？」

「んーできればアクセサリーがいいんだけど。ブレスとかネックレスとか。」

そっか。

アクセサリーか・・・。

私はあまり装飾品は得意じゃなくて、ほとんど身に着けたりしないんだけど。

ちゃんと選べるかなあ。

「この店、入ってみよっか。」

店内は沢山のお店が並んでいて、それぞれがイメージに合うような内装で商品を並べていた。

佐伯くんが示したお店は、少しカントリー風な、私の好きな雰囲気雑貨屋さんだった。

中はお財布からポーチ、パンプスにブーツ、少しの衣類と、沢山のアクセサリーが並んでいた。

「へえ、女子ってこういう店で買うんだな。」

佐伯くんは近くにあったシュシュを手にとると、その輪をぐいぐいと伸ばしながら言った。

「さ、佐伯くん、あ、あんまり、ひっぱると、ゴム、の、伸びちゃう、」

「あ、ごめん」

更に奥に進むと、お目当てのブレスやネックレス、イヤリングにピアスが並んでいた。

「うわー沢山あんな。」

ハートやら星やらの飾りが、柔らかい照明できらきらと輝いている。中には貝殻をモチーフにした大きなネックレスもあって、私はあまり好きではなかったけれど、とても存在感があった。

「女子って大変だよな。こんな中から毎回選ぶんだし。」

佐伯くんは適当に手にとったりしては、へえーとか、ふーんとか言っている。

私はそれを聞きながら、ゆっくりと並べられた商品を見ていった。佐伯くんがせっかく私を選んでくれたのだから、期待に応えるためにも一生懸命に選ばなくちゃ。

私が好きなものというより、お洒落な女の子たちがつけてそうなデザインのを。

きらきらと輝く、甘い香りのする女の子たちのアクセサリーなんだから……。

そんなことを考えていたら、一つのネックレスが目にとまった。思わずそれを手に取る。

「……かわいい。」

それは決して派手ではなく、四葉のクローバーとリスのチャームが揺れているネックレスで。

私の大好きなデザイン。

つまりそれは、佐伯くんに釣り合うようなキラキラとした女の子が喜ぶようなものでは決してなくて。

私はいけないと思って、それを元の場所に戻そうとした。

「橘、それがいいの？」

後ろから声がしたかと思うと、ひょいと手元のネックレスを取り上げられて。

「あ、ちが、」

「結構シンプルだな」

「そ、それ、ちがう！わ、私がす、好きなだけで、ぷ、プレゼントには、」

「これでいいじゃん。橘が選んだんだし。」

「え、ちょ・・・」

「じゃ、買ってくる」

引きとめようとしたけど少し遅くて、クローバーとリスのネックレスは佐伯くんを持って行かれてしまった。

「ど、どうしよう・・・」

私は、もしその女の子に気に入ってもらえなかったら、という不安でいっぱいになった。

折角、佐伯くんが私を頼ってきてくれたのに。

その女の子に嫌な顔をされたら・・・。

嫌な顔・・・？

ふと浮かんだ疑問。

相手の女の子は嫌な顔なんてするだろうか。

だって、佐伯くんからのプレゼントで。

佐伯くんから貰ったら、どんなに可愛くないものでも嬉しく思ってしまうんじゃないだろうか。

そもそも、

そのネックレスは、誰にあげるの？

女の子って言ってた。

妹やお姉さんはいないって前に聞いた。

彼女も・・・いるとは、聞かない。

じゃあ、誰？

好きな、人？

佐伯くんの、好きな、女の子に。

私はその時、自分がかすかな期待を抱きはじめていたことに気が付いた。

叶うはずもない、淡い夢。

私は・・・。

「お待たせ。」

笑顔で戻ってきた佐伯くん。

その手には、私の選んだネックレス。
可愛い袋に入れられていて。

四葉のクローバーも小さなリスも、
もう見えなかった。

忘れていたこと

佐伯くんと出かけてから二日後の月曜日。

あの日はネックスレスを買った後、佐伯くんがお礼にとケーキを奢ってくれて、二人で食べてから別れた。

家に帰ると携帯に佐伯くんから「ありがとう。」とメールがあつて。私も「ケーキご馳走様でした。」と返事をした。ネックスレス喜んでもらえるといいね、とは、書けなかった。

「ねえ、橘。」

放課後で、帰ろうと鞆の中に教科書を詰めていたら名前を呼ばれた。顔をあげると、ほとんど話したことのない近藤さんと、田中くんと、新藤さんが立っていた。

三人とは同じクラスだけど、全くといっていいほど交流がなかった。近藤さんも新藤さんも派手でとてもお洒落な女の子だったし、田中君も（名前こそ地味だけど）ワックスで立たせた髪とかがお洒落な男の子だったから。

私みたいな地味なのとは住む世界の違う人たちで。

「ちょっと今からいい？」

そんな人たちが、私に何の用なのだろう。

何故か良い予感なんて全くしなくて、本当は断りたかったけれど、私は大人しく三人に着いていった。

連れてこれた場所は、四階の音楽室の隣の、宗教室とかいうよくわからない教室で（本当に何に使う部屋なんだろ・・・）、全員が入るとドアがぴしゃりと閉められた。

「あ、あの・・・」

「橘、土曜日佐伯さんと二人でいなかった？」

へ？

「偶然見ちゃったんだよね。佐伯さんとあんたが二人で駅前歩いてるそこ」

いきなり開始された会話に私は着いていけない。

土曜日。

うん、佐伯くんといった。

だけど、それが・・・？

「ずっと言おうと思ってただけだよ、あんた目障りなの。」

「え・・・」

「佐伯くんと喋ったり、一緒に帰ったり。自分がどういう存在かわかってやってんの？」

「うへー、新藤きつついなー」

近藤さんと新藤さんの会話を聞きながら、立っているだけだった田中くんがくつくつと笑った。

「ど、土曜、日は、佐伯くんに、た、たのま、れて・・・」
「は？聞こえない。」

声のボリュームが上がった近藤さんに思わず目を瞑る。

「あんたは、誰かに好意をもつのは自由とか思ってるのかもしれないけどさ、」

近藤さんより小さな新藤さんの声に、何故か神経が震える気がした。駄目。

それ以上言わないで。

聞いちゃ、駄目。

「あんたに好意をもたれた佐伯くんが、どんだけ迷惑してるかわかってんの？」

聞きたく、ないのに。

「まあ、佐伯くんは人がいいから正直なところとか言わないと思うけど、あんたと一緒にいるだけで佐伯くんの価値が下がるわけ。わかる？」

佐伯くんの価値が。

私と一緒にいるだけで。

「あんたみたいなブスで根暗なやつは、佐伯くんの汚点にしかならないんだよ。」

「あんたが佐伯くんを汚してんの。」

「あんたは佐伯くんに近づいていい存在じゃないのよ」

「あんたは人を好きになっちゃいけないの」

「あんたに好かれた人は、迷惑としか思わないんだから。」

何かがストンと落ちる音がした。

小さな石のようだけど、何故か酷く重い。

それは、私の心の奥に、昔から徐々に降り積もってきた。

「あんたは・・・」

私は、何も言い返せなくて。

ただ、恐かった。それ以上に何かを言われることが。

前にも、言われたことがあった。

だけど、佐伯くんと一緒にいると楽しくて忘れてしまっていた。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

私はただ謝り続けて。

近藤さんたちは満足したように出て行った。

私は、

私は誰かを好きになっちゃいけない。

ただ迷惑をかけてしまうだけだから。

「おい、橘、お前のことが好きなんだってよ!」

中学二年の、一学期の終業式の日だった。

蝉が鳴き出して、教室の中もクーラーなんてなかったからむわっと
していて。

明日から、夏休みっていう日。

「やっ！か、返してよ！」

中学に入学したときから好きだった男の子に、いつか渡そうと思っ
て書いたラブレターを、たまたま鞆から落としてしまった。

そしたらそれを目敏く拾った他の男子が、ひらひらと掲げながら、
手紙の相手の男の子へと呼びかける。

「え？」

言われた男の子はこちらをくるりと振り返った。

手紙を持っていた男子は、その手紙をピリッと開けて便箋を取り出
すと、書いてあることを声に出して読み始めて。

「や、やだ！返し、て！」

「『私は、入学したときに、上手く話せなかったけど、』」

「お願い、い！や、めて！」

もう泣きたかった。

恥ずかしくて。

消えてなくなりたいかった。

「『ずっと、笑顔で明るい姿を、』」

「やめろよ！」

ラブレターの相手の男の子の大きな声で、一瞬でシーンと静まった。

私は、彼が私を助けてくれたのだと。
そう思った。

だけど。

「冗談じゃない。ブスに好かれたって、恥ずかしいだけだし。迷惑なんだよ。」

そう言うと、彼は鞆を肩にかけて教室を出て行ってしまった。

まだ、教室は静まったままで。

手紙をもっていた男子は、小さく「ごめん」と言っ手紙を私の机の上に置いた。

その時も、ストンと落ちる音がした。
それが、最初だったのかもしれない。

机に置かれた手紙を私は手に取った。
ぐしゃりと、握り締める。

シールも、封筒も、便箋も。
私の心も。

全部ぐちゃぐちゃにして。

ゴミ箱に捨てた。

何故か涙は出なかった。

あの時から、私はずっと思ってきた。
誰かを好きになっちゃ駄目。
迷惑をかけちゃうからって。

ちゃんと、分っていたはずなのに。

「あ、橘！いた！」

宗教室を出て、教室に戻ると、佐伯くんが駆け寄ってきた。

「あ・・・」

「一緒に帰ろうって思ったんだけどさ、なんか見当たらなくて。
・・・
橘？」

いつもと代わらない優しい声。
大好きな明るい笑顔。

だけど私は目を合わせることができなくて。

「どうした？何かあった？橘・・・」

「やめてっ！」

私の肩に伸ばしてきた彼の手を、思わず払いのけてしまった。

「あ、ご、ごめ・・・」

「いや、それより、お前のほうが・・・大丈夫か？なんか、」

少し目線を上げると、佐伯くんの心配そうな目とぶつかって。

「辛そうだよ。」

お願い。

優しくしないで。

『あんたと一緒にいるだけで佐伯くんの価値が下がるわけ』

「だ、大丈夫、夫」

優しく、

『あんたに好かれた人は、迷惑としか思わないんだから』

しないで。

「荷物もつし、駅まで一緒に」

「私、今から職員室にいかなきゃ行けないの。」

「え？あ、そうなんだ。じゃあ待っとくし」

「何時になるかわからないから、先に帰って。」

つま先が、揺れている。

ゆらゆら。

ゆらゆら。

にじんでき。

「ごめんね。」

私は鞆を引っ掴んで教室から飛び出した。

佐伯くんは追いかけてこなかった。

また、接点のない、

人気者と

地味なヤツ

に戻る。

ただ、それだけのこと。

これで、いいんだ。

これが、正しいんだ。

これしか、駄目なんだ。

届かない言葉

朝、学校に行きたくないなんて思ったのは、何ヶ月ぶりだろう。

もたもたと朝食を食べて、もたもたと歯を磨いて、もたもたと家を出た。

学校に行きたくない。

だけど、行かなくちゃいけない。

佐伯くんは、会いたくないのに。

会ったら、また彼の優しさに甘えてしまいそうになる。

挨拶も、しない。

目も、合わさない。

昨日、寝る前に決めたこと。

考えているとき、辛くて涙が止まらなくなつて。
なかなか眠ることなんてできなかった。

だから、学校なんて行きたくない。

私が学校に着いたときは、まだあまり人がいなかった。
教室に入って、廊下側の後ろの席について。

鞆の中から一時間目の用意を取り出す。

予習はしてある。あとは授業が始まるのを待つだけ。

ふと、前のほうを見た。

窓際の前から二番目の席。

いつも、佐伯くんが座っているところ。

授業中、誰にもばれない様に、こっそりと佐伯くんを見たりもした。

五時間目の時なんかは、うとうとと頭が上下に揺れていた。

先生に当てられないように、祈るように下を向いていたり。

HRのときは率先してクラスを纏めようとしていたり。

私は、この席から色んな佐伯くんを見た。

佐伯くんは前の席なのに。

毎日後ろの入り口から入ってきてくれて、私に「おはよう」と言ってくれた。

たまに一緒に帰ろうと誘ってくれた。

全部、全部嬉しかった。

佐伯くんが好き。

佐伯くんが好き。

佐伯くんが大好き。

だから、私は今日から関わらない。

佐伯くんに迷惑がかからないように。

私のせいで佐伯くんの価値が下がらないように。

絶対に。

もう、決めたことだから。

教室が、騒がしくなっていく。

朝のSHRが始まるまであと五分をきった。

佳世が入ってきて、おはようと挨拶をかわす。

そのとき、ふと佳世の価値まで下げてしまっているのかと不安になったけれど、今はそのことには目を瞑るようにした。

佐伯くんのが落ち着いてから、ちゃんと考えるよ。

ごめんね佳世、と心の中で謝った。

そのとき、入り口から聞きなれた声があった。

低くて優しいアルト。

私の身体が、ぐっと硬くなる。

佐伯くんは、今日も後ろの扉から入ってくる。

どくどくどく。

心臓が、速くなる。

どくどくどく。

挨拶は、しない。

どくどくどく。

目も、合わさない。

どくどくどく。

「おはよ、橘。」

ぽん、と肩に手が乗せられる。
更に身体が硬くなったように感じた。

「橘？」

私は、何も言わずに、
そっとその手を退かした。

何も言わない。

ずっと下を向いたまま。

早く。

早く行つて。

お願いだから。

早く。

ぎゅっと瞑った目が、少し痛いと感じたとき、佐伯くんが離れていくのが分つて。

体中の力が抜けていく。

へにゃへにゃと、机に突っ伏した。

なんだ。

できるじゃん。

私は何故か笑いがこみ上げてきて、それを隠すように唇を強く噛んだ。

痛いなんて、感じなかった。

「唇、切れてるよ。」

十分休み。

あと六時間目を受ければ今日の授業は終わり。

そんなとき、佐伯くんは再び私に話しかけてきてくれた。

かたんと、私の前の席に座る。

「ねえ、橘、聞ってる？」

佐伯くんの声。

聞ってる。

聞ってるよ。

佐伯くんの声は、全部私の耳に入ってくるよ。

唇は、朝強く噛んだのが、なかなか治らなくて。

今も軽く血が滲んでいた。

「・・・・・・・・。」

私は、下を向いて、何も話さない。

「：昨日から、変だよ。何か悩んでるとか？」

佐伯くんの声が、不安げに揺れる。

「言つてよ、じゃなきゃ分らない。」

そりゃそうだ、なんて心の中で思った。
だけど、言えないんだよ。

だから。

こんなに、私も苦しんでるのに。

「橘。」

「・・・・・・・・。」

分つて欲しい。

だけど、分つて欲しくない。

「なあ・・・・・・・・！」

少しずつ大きくなる、佐伯くんの声。

「・・・・・・・・。」

全てを話せたら。

貴方は何と言う？

「たちばなっ！」

「・・・・・・・・。」

きつと貴方はそんなことはないと笑つて、私を受け入れてしまう。

それじゃ、駄目なんだよ。

「・・・俺、何かした・・・？」

佐伯くんの声が微かに震える。

「・・・・・・・・。」

「何かしたなら、謝るから。」

違う。

佐伯くんは何も悪くない。

「・・・俺のこと、嫌になった？」

そんなこと、あるわけない。

私が佐伯くんを嫌いになることなんて、あるわけないじゃない。

「・・・・・・・・。」

だけどその想いは勿論伝わるはずも無く。

「・・・もう、いいよ。」

その時、佐伯くんがどんな表情をしていたかはわからない。

私はそれからもただ黙って、下を向いて。

机の木目を睨んでいて。

タイムアップを告げるかのように、チャイムが鳴った。

佐伯くんは、私から離れていった。

ゆっくりと顔を上げる。

佐伯くんの席は、起立したクラスメイトたちで見えなかった。

席に座って私は目を閉じる。

ただ、これでよかったのだと、私は何度も自分に言い聞かせた。

「綾子ちゃん、佳世ちゃんよー」

下の階からお母さんの声が聞こえて、私は「今いないっていつて」と答えた。

今は、誰とも会いたくない。

誰とも、会いたくなかったのに。

「この私に居留守使おうだなんて、あんたいつからそんなに偉くなったのよ。」

勢いよく開けられた扉に、私は泣きはらした目を擦りながら顔を上げた。

「で、その腫れた目について話を聞きたいんだけど。」

ベッドに並んで座った佳世は、私の顔を覗き込んで言った。

「……。」

「佐伯、だよね？ 今日佐伯と何か話してたし。放課後も様子が少し変だったから。」

私服に着替えている佳世は、私がまだ制服なのもおかしいと言った。

もう夜の八時近くだったから。

「わ、わたし……。」

「うん？」

「佳世……ごめんね」

「はい!？」

私は口を開いたら、涙腺まで開いてしまったみたいで、また涙がぼろぼろと出てきて。

唐突な謝罪の言葉と涙に、佳世はハテナマークを飛ばしていた。

「ちよっ、どうしたのよ、綾子」

「わ、私、と、い、いたら……ヒック……佳世の、か、価値も、下がっ、ちゃうのに……ヒック……。」

「え?。」

「ご、ごめ・・・なさ・・・佳世、とは・・・ま、まだ、・・・もう、少、しだ、け・・・一緒・・・いた、い・・・」

涙と鼻水としゃっくりと嗚咽で、私はもうぐちゃぐちゃで。だけと言わなきゃいけないと思って。

「なに言ってるの？」

まさかそんな一言で片付けられるなんて思っても見なくて。

「あんた馬鹿じゃないの？ なによ、価値が下がるって」

いつもと違う佳世の声に顔を上げると、なんだかすごく辛そうな表情をしていて。

「そんなこと言う綾子なんて嫌いよ。」

そう言われて、私は身体が震えた。

佳世は私から目を逸らすと、ベッドから立とうとして。

私は、離れて行ってしまるのが嫌で、咄嗟に佳世の腕にしがみついた。

「い、いやだ！ ご、ごめ、なさ、い！ や、やだあ！」

もう自分がどうしたいのか分らなくなつて。

私はやっぱり一人になるのは怖くて。

「うああー！！ いかな、いでえ！」

佳世の服が汚れるとか、そんなこと気にする余裕もなかった。
私は佳世の腕に抱きついたままわんわん泣いた。

「馬鹿ねえ・・・」

頭がくらくらしても、叫びのような泣き声を止めることはできない。
佳世はもう何も言わずに、そっと私を抱きしめてくれた。

多分、その時

佳世も泣いていたのだと思う。

かすかに鼻を吸る音が、聞こえてきたから。

少し落ち着いて、私は佐伯くんのことを話した。

近藤さんたちに言われたことも、私が過去に言われたことも。

佳世は私の話を聞いてすごく怒っていたけれど、やっぱり佐伯くんとはもう関わらないほうがいいと思うと私は言った。

佳世に叱られて、私のしていることは間違っているのかもしれない
と思ったけれど。

佐伯くんの価値が下がってしまうという言葉が、何処か心の奥を雁
字搦めにして、離してくれそうになかったのだ。

佳世はまた悲しそうな顔をして、「わかった」とだけ言った。

何かあったらすぐに言っよ、と、私の頭にぽんと手を乗せた。

その時の感覚が、ふとお弁当と一緒に食べたときの佐伯くと重な

ってしまつて。

私はまた泣きそうになって、必死に堪えた。

佳世が帰ってから、私は携帯電話を取り出した。

開くと、着信が三件あった。

全て佐伯くんからだった。

私は着信履歴を辿る。

二時間おきくらいに掛けられてきていた。

佐伯秀介。

佐伯秀介。

佐伯秀介。

ぽたり。

一つ一つにカーソルを合わせて行き、確認済みにする。

ぽたりぽたりぽたり。

「うつ・・・うつ・・・」

雫が液晶をぬらしていく。

再び零れだした涙は、止まらなくて。

鼻水もとまらなくて。

ズズと鼻が音を立てる。

漏れるのは、嗚咽ばかり。

私は携帯を閉じて、ストラップに手を掛けた。
ゆっくりと、外していく。

『よかったら、メアドとか交換しない？』

慎重に。

『これ、よかったらやるよ』

思い出すのは、

『いいから！もらって！』

貴方の優しい笑顔ばかりなのに。

携帯電話から取り外されたそれは、不安げに揺れているようで。

「うつ・・・うつ・・・」

私はその羽根を、そっと宝箱の中に閉まった。

「あ・・・ありが、と・・・あり、がとう・・・」

届くはずもないのに。

「ありがとう・・・！」

私はただひたすら、そう繰り返していた。

肩に残る感触

辛い。

明るい日々慣れてしまっていたから。
貴方の優しさに触れてしまったから。

今は、何をするのも、
辛い。

一日が過ぎるのって、こんなに長かったっけ。
朝起きて。

学校に行って。授業を受けて。お昼を食べて。また授業を受けて。

あの日から、まだ三日しか経っていないのに。
私はもう、眠ったまま目が覚めなければいいのになんて。そんな馬鹿なことを考えたりしていた。

「綾子、大丈夫？」

一時間目が終わった頃。
声を掛けられて、机に突っ伏していた私は顔をあげた。

「佳、世・・・」

「あんた、大丈夫？ 顔色悪いよ？」

ごしごしと目を擦る。

眠いわけではないのに、何故か頭がぐわんぐわんして。

「ん・・・大、丈夫。」

心配そうな佳世の顔を見て、私は無理に笑おうとした。
へにゃりと、顔を崩す。

その下手くそな笑顔を見て、さらに佳世は心配そうに眉を寄せた。

「本当に？ 今日三時間目体育だよ？」

「う、うん。」

「ハンドボール。試合なんだよ？」

「・・・うん」

はあと、佳世のため息。

「本当の本当に大丈夫？」

「だ、大丈夫だってば・・・」

多分、と心の中で補っておく。

まだあと体育まで一時間あるし。先生には悪いけど、席に座ってゆっくりとしていれば今日一日はなんとか乗り切れると思った。

そう。

席に座ってゆっくりしていれば、の話。

「じゃあ次、橘。もう最後まで読んで。」

現代国語の授業ではよくあることだけど。
どうして今日に限って当たるのだろうか。私は自分の運の無さにうんざりしながら、しぶしぶその場に立った。

「よ、よって・・・私たちの社会に、は…こ、コンピューターの、」

「ストップ。橘、そんなじゃ何言ってるか聞こえない。もう一度はじめから読んで。」

ただでさえ音読は苦手なのに、よりにもよってこんな体調の時になんて。

頭では無理だよと思っていても、先生に言う勇気なんてなくて、もう一度当たった個所の頭に戻る。

「よ、よって、わ、私、たち、の、社会に、は、コン、コンピューターのふ、普及が、」

「橘。お前もつと声出るだろ。」

もともとこの先生から気に入られていないからなのか、それともそんなに私の声が小さすぎるのか。

先生は苛ついたように言いながら、こちらへ歩いてきた。

「ほら、もう一度。」

先生が言う。

私は読む。

止められる。

「橘、いい加減に声だせ。」

先生が言う。

私は読む。

止められる。

「聞こえない。」

もう、いいじゃない。

しんどい。辛い。

私の声が聞こえなくなったら、誰も困ったりしない。
私がいなくなったら、誰も困ったりしないじゃない。

私なんて・・・。

「お、おい！」

もう一度読もうと口を開いたとき、目の前が回った。

がたがたと、椅子と机が動く大きな音がした。

「大丈夫か!？」

倒れそうになった私を、先生が支えていた。

別に、意識を失うとか、そんなことはないみたいだけど。

「す、すみま、せん」

「橘、お前保健室に行け。顔が真っ青だ。」

先生の言葉に、教室が少しざわついた。

「おい、保健委員、こいつを保健室に連れて行ってやってくれ。」

先生が呼びかける。

一人で大丈夫ですと言おうとしたとき。

「はい。俺が行きます」

と、一人の男子が立ったのが見えた。

こちらに歩いてくる。先生が「頼む」と私を彼に引き渡した。

私は彼に肩を支えられて教室を出ていく。

廊下は静かだった。並んだ他の教室から、先生たちの声が聞こえてくる。

足取りはゆっくりだった。私に合わせてくれていた。

だけど、私は彼のことを見れなかった。

保健室に着くまで、ずっとずっとつま先を見ていた。

彼が、佐伯くんだったから。

保健室に着くと、ベッドは一つしか空いていなかった。

私の顔色を見た先生は、すぐに寝るように言って。

佐伯くんが、私をベッドまで連れて行ってくれた。

ベッドに腰掛ける。

その時、カチャンと音がし、見ると佐伯くんの足元に私の携帯電話が落ちていて。

また前のように何もついていないワインレッド。

羽根は、もうない。

どくどくどく。

心臓が速くなる。

何か言われるかと思った。

「ストラップ捨てたんだ？」とか「あげなきゃよかった」とか。

だけど佐伯くんは。

何も言わずに、それをそつと枕元に置いた。

気付いたはずなのに。

ストラップが外されていることに、絶対気付いているのに。

その時に私の口から漏れた息が、安心からなのか、それとも何か他のものからなのかは分らなかった。

ベッドに潜り込む。

すると、彼はそつと布団をかけ直してくれて。

その全てがまだ優しさに満ち溢れていたのに。

私は目をあわさないようにずっと窓の方ばかり見ていた。

布団が柔らかい。

硬いベッドだけれど、とても柔らかく感じる。

少し冷たい風が、二人の間を通り抜けていく。

「橘。」

佐伯くんがぼそりと私の名前を呼んだ。
ぴくりと肩が揺れる。

「ごめんな。」

風で、カーテンがふわりと膨らむ。

「もう、これきりにするから。」

その言葉に、私は思わず視線を上げた。

そこには、今まで見たことのないような佐伯くんの表情^{かお}があつて。

佐伯くんは、一度目を閉じると、そのままカーテンを揺らしてベッドスペースから出て行った。

スローモーションのようにその光景が映る。

一人になったベッドスペースには、まだ風が静かに流れていて。

保健室の先生が何か話す声がして、その少し後に扉が閉まる音がした。

佐伯くんは出て行った。

保健室から。

私の日常から。

私は、引き止めることなんてできなかった。

これでもう本当に、お終い。

少し開けられた窓から、外の声が聞こえてくる。
体育なのか、とても楽しそうな声。

上体をゆっくりと起こす。目に入っただのは、丁寧に揃えられた私の上靴。

佐伯くんが支えてくれた肩にそっと触れた。

そこは、漫画みたいに熱くもなんともなかったけど。

その感触はまだ微かに残っているように。

自分でその部分をぐっと掴んだ。

強く強く強く。

「さ、えき……くん……」

その感触が、消えて欲しくなかった。

「佐伯くん……佐伯くん……!」

吐息のようにこぼれ出るのは、もう決して呼ぶことのない名前。
彼の手は、いつも暖かくて大きかった。

好きで。

好きで好きで好きで。

諦めると決めたのに。

まだこんなに好きで。

貴方にこの気持ちを伝えることができれば、どんなに幸せなのだろう。

例えば貴方の価値が下がってしまうとしても、ずっと貴方の隣にいたいことができるなら。

佐伯くんに会って、私の心は言うことを聞いてくれなくなった。こんなに辛い思いをするなんて、思っても見なかった。

だけど。

私は何故か、

佐伯くんを好きにならなければよかったとは、思わなかった。

ごめんねの代わりに

「ねえー、まだ掃除終わんないの？ 橘ア」

「あ、ご、ごめ、あと、少し」

「早くしろよー。俺らも暇じゃねえんだからさー」

あれから二週間が経って、今は音楽室の掃除担当。

他の四人は相変わらず掃除はしてくれなくて。

私一人でやっている状況。

文句も言えずに、私はせつせと箒を持つ手を動かした。

少し前と変わらない日常。

これが私の日常。

佐伯くんとは、今では全く話さない。

すれ違っても挨拶なんてしない。

当然のように目を合わせない。

もしかすると、あの眩しかった日々は夢だったんじゃないかって。

眩しくて眩しくて寂しい、いつか見たあの夢の一部だったんじゃないかって。

そんな風に思ってしまうくらい、私と佐伯くんの間にはもう何もなかった。

「お、あとごみ捨てだけじゃん。」

「ごみ捨てもよろしくねー橘。」

「あ、う、うん」

四人は箒をロッカーに乱暴に入れると、ぞろぞろと話しながら出て行ってしまった。

私は隅においてあるゴミ箱の中身を、青いゴミ袋へと移す。

もともと特別教室だからか、そんなに量は多くなくて、ゴミ袋は口を縛ったあとも、空気ではんの少し膨らんでいるだけだった。

窓を閉めて、ブラインドを上げて、部屋の電気を消して。

靴とゴミ袋を持つと、音楽室を出てごみ焼却炉へと向かった。

放課後で、部活動などがあるからか、廊下にはまだちらほらと人が残っている。

「これから遊びに行こう」とか「今日うちに遊びに来いよ」とか、楽しそうな話声が聞こえてくる。

私はなんだか寂しくなって、早く帰ろうと足を速めた。

一階分階段を降りて、西側から東側へとうつる廊下を歩く。

ぺたぺたぺた。

はやく。

はやく。

そのときだった。

「えー、いいじゃん秀介えー」

少し高めの声。

秀介という名前に反応する。

佐伯くんの下の名前。

「最近一人で帰ってるじゃーん。一緒にカラオケ行こうよー」

そっと顔を上げると、そこにはやっぱり佐伯くんが歩いていて。

横には、お洒落で可愛い女の子。

絡まる腕。

近い身体。

私は思わず立ち止まってしまった。

「んーだから・・・」

相変わらず優しい佐伯くんの声。

困ったように笑っている。

ぼおっと見ていると、佐伯くんが顔をこちらに向けて。

視線が、合った。

お互い、この時は、何故か目を逸らさなかった。

それはほんの五秒、ううん一秒くらいだったのかもしれないけれど。
私にはとても長く感じられて。

「さ、さえ、きく・・・」

私は思わず佐伯くんの名前を呼んでしまった。

そんなに離れていない距離だったから、絶対に聞かれてしまったのに。

佐伯くんには、絶対に聞こえていたはずなのに。

彼は、ふいと目を逸らすと、

「いいぜ、行こう、カラオケ。二人で」

そう笑って、女の子と一緒に私の横を通り過ぎていった。

『橘、おはよ』

いつかの、佐伯くんの笑顔が頭の中を過ぎる。

私に向けられたそれは、ひどく明るくて。

今は、とても辛い。

これは、自分が望んだことだから。

佐伯くんを避けたのは私。

好きになっちゃいけないのも私。

だから、私には泣く資格なんてない。

こうなることは、わかっていたことなんだから。

これが、私の日常なんだから。

あと少し時間が経てば、全てが元に戻る。

私も。

私の気持ちも。

ゴミ袋が、ぱさりと手から落ちて。

私はふとゴミを捨てに行かなきゃと思い出した。

焼却炉はグラウンドの隅にあって、サッカー部や野球部が声をあげて走り回っているのを見ながら、のろのろと歩いた。

砂埃が舞って、遠くがかすかに茶色く霞んで見える。

小さな焼却炉の周りは石で作られた塀で囲まれていて、その焼却炉テリトリーには数個のゴミ袋が置かれていた。

適当なところにポスンと持っていたゴミ袋を置いて、そこを出ようとしたときだった。

私は思わず足を止めた。

見覚えのある小さな包みが目の端に入ったから。

焼却炉を囲む塀のすぐ傍にぽつんと置かれたそれは、とても可愛らしいラッピングがされている。

それは小さくて、たぶん燃やすときにも忘れられているような、そんなちっぽけな存在のようだった。

だけど、私は忘れることなんてできない。
そっと、包みを開ける。

四葉のクローバーとリスが、ゆらりと揺れた。

どうして、これがここにあるの？

どうして、捨てられているの？

どうして、

どうして・・・？

あ、もしかして。

私が、選んだから・・・？

私が選んだものだから・・・？

やっぱり、私なんかが、

「・・・何やってんの。」

いきなり声をかけられて、私は反射的に振り返った。

「あ・・・」

そこには、佐伯くんが立っていて。

カラオケは・・・とか思ったけれど、やっぱり口にはできなかった。

「それ・・・なんで橘がもってんの・・・」

私が手にしていたネックレスを見ると、佐伯くんはくしゃりと顔を歪めた。

「こ、これ、は・・・」

「返せよ。それはもう捨てたんだ。」

「で、でも、」

「返せて・・・」

佐伯くんの手が伸びてきて、

「や、やだ!..!」

私は思わず大きな声を上げてしまった。

「は。なんなんだよ。」

「わ、私が、選んだ、から、あ、あげられ、なかったんだよ、ね。」

「・・・なにいつてんの」

不機嫌な佐伯くんの声に、思わず負けてしまいそうになったけれど、私は続けた。

「す、捨てちゃうなら、ちょうだい！これ。」

私は顔をがばりとあげて佐伯くんを見た。

少し驚いたような顔をした後、再び佐伯くんの眉間には深い皺ができた。

「あ、お、お金なら、払う、から、だから・・・」

「・・・金払うなら、自分で同じの買いに行けばいいじゃん」

「え・・・」

たしかに、そうだね。

でも、

忘れたくないから。

「い、いやだ。私は、これが、欲しいの。」

佐伯くんと交わした会話とか。

駅前で二人で笑ったこととか。

掃除のときに助けてくれたこととか。

一緒に出かけたこととか。

全部

全部

すごく嬉しくて、幸せだったから。

ストラップも。

このネックレスも。

私には、何よりも大切な思い出だから。

忘れたく、ないから。

「こ、これじゃなきゃ、だ、駄目な、の」

佐伯くんの好きな子にあげるはずだったものでも構わない。

我俣だって、わかっているけど。

佐伯くんを困らせてしまっているのもわかっているけど。

これを、最後にするから。

「お、お願い、い、しま、す……ご、ごめ……なさ……」

いつから零れていたのか、頬をぽろぽろと涙が伝って。

目の前がゆれる。

ゆらゆら。

ゆらゆら。

あの時と、

私が佐伯くん初めて嘘をついたときと同じ。

目の前が。

「なんでそうやって期待させるようなこと言うんだよ！」

唐突に佐伯くんの声が響いた。

「俺のこと避けたのは、橘だろ！なんでそんな思わせぶりなことするんだよ！」

何を、言ってるの？

「さ、えき、く」

思わせぶり？

「ストラップだって・・・外すくらい・・・」

小さな、弱い声。

「俺のこと・・・嫌になったのは、橘じゃないか・・・」

言いながら、佐伯くんはなんだか苦しそうな表情をして。それを見て、私も苦しくなった。

ああ、私。

佐伯くんにこんな顔させたかったわけじゃないのに。

そのときやっぱり、私は間違っていたのだと思った。

「め、迷惑だって、い、言った・・・」
「は？」

「私が、一緒にいたら、さ、佐伯くんの、価値が下がるって言った！」

「誰がそんなこと言ったんだよ！」

私の言葉に、佐伯くんが険しく声を荒げる。

「そんなわけないだろ！」

それでも私を見る瞳に、怒りなんて含まれていなくて。

「い・・・ヒック・・・一緒に、いても・・・ヒツ・・・い、いいの・・・？」

一緒にいても。

好きでいても。

いいの？

「ずっと思ってた。駅で初めて橘を見かけたときから、どうしてこの子はこんなに悲しそうな表情カオしかしいんだらうって。」

「駅・・・？」

「同じクラスなのを知って、掃除のとき困ってるの見て、思い切って話しかけて分ったんだ。」

佐伯くんが、静かに微笑んだ。

「自分に自信がないんだって。」

自信。

私に自信なんて。

「だけど話してみたら、確かに話すの下手だけど、優しく笑うところが見たらさ、俺にとってはすごく魅力的な女の子だったんだよ。」

魅力的？

私が？

「迷惑なヤツに、ストラップやったりしない。」

「迷惑なヤツと、飯食ったりしない。」

「迷惑なヤツを、気にしたりしない！」

胸に響く佐伯くんの言葉。

「俺を、信じてくれよ・・・」

そうだね。

思い出すのは、いつもいつも、

優しい佐伯くんの笑顔と、優しい言葉ばかりだった。

「俺がいないときでも、例えば駅のホームでも笑っていて欲しかった。」

「どうすればいいのか、正しい答えなんて結局わからなかったけど。」

「

佐伯くんは私の手からそっとネックレスを取ると、それを私の首にかけた。

「うん。似合ってる。」

私の胸元で、クローバーとリスが揺れる。

「本当は、駅で渡したかったんだけど。」

焼却炉の前になっちゃったと、恥ずかしそうに笑う佐伯くんが、なんだかとてもおかしくて。

「お、笑った笑った。」

私は涙をぼろぼろ零しながら、ぐちゃぐちゃな顔で笑った。

「俺は橘のこと、好きなんだけど。橘は、俺のこと、嫌い？」

あんなに酷いことをしたのに、まだ私を好きでいてくれた佐伯くんにもう何て言ったらいいか分らなくなってる。

私が「今までごめんなさい」と謝ると、佐伯くんはクスリと笑って。

「今は『ごめん』じゃなくて」

「好きって言って」と、耳元で囁かれた。

私は可愛くないし、地味だし、明るくもないし、人見知りだし。そんな私に好かれても、その人は迷惑しちゃうだけだから。

今も、誰かを好きになるのには勇気がいるけど。

貴方が私を想ってくれていることを信じて。

貴方に相応しい、素敵なお私になりたい。

『おい、お前らちゃんと掃除しろよ。橘、困ってんじゃん。』

あの時から言うことを聞いてくれなくなった私の心は、多分これからも、貴方から離れられないと思うから。

☆おわり☆

おまけ

「ストラップは捨てちゃった？」

帰り道、二人で並んで歩いている。

「う、ううん。お家の、た、宝箱に、」

おー大切にしてくれてたんだ。
てっきり捨てられちゃったかと思ったよ。

「あの、か、カラオケ・・・」

「ん？ いきたいの？」

聞き返すと、「ち、ちがう」と橘は顔を赤くして首を横に振った。

ちえ。違うのか。

「お、女の子と、行かなくて、よ、よかったの？」

女の子・・・？

あー廊下ですれ違ったときのことね。

「んー、だって断ったし。」

「え？」

「俺ね、好きな女の子としか二人で出かけたりしないんだよ。」

そう言うと、橘の顔はますます赤くなって。

思わず抱きしめたいだなんて思ったのは、まだ彼女には言えそうにないです。

（強制終了）

最後まで読んでいただいてありがとうございました。

只今、『ごめんねの代わりに』スピンオフ作品

『GO!GO!WITH☆YOU』

[http://pkcr.jp/novel/book.php?
novel_id=50145&guid=ON](http://pkcr.jp/novel/book.php?novel_id=50145&guid=ON)

を携帯サイトポケクリ（PCでも閲覧可能）にて連載中です。

こちらは家庭教師コメディとなっております。

こちらも読んでいただけるととても嬉しいです。

ご感想は、ユーザー未登録の方でも書き込み可能となっております。
一言でも二言でも、何か書いていただければ幸いです。

木村よし

おまけ（後書き）

こんにちは、木村よしです。

「ごめんねの代わりに」を最後まで読んでくださってありがとうございます！

お気に入り登録数などはまだまだほんの些細な数ですが、それでも一件増えるたびにとっても幸せな気分になっておりました。

今回の作品は、初めは一話、五話、六話、九話からなる、全四部の短編予定でした。

しかし掲載したり書き直したりしているうちに、気が付いたら全十部になってしまい・・・微妙な長さになってしまいました。

佐伯と橘は多分幸せになるんじゃないかなと思います。が、もちろんライバルなんかも現れて、色々苦労は絶えないとは思いますが笑。今回のヒロイン橘綾子は、私が描く他のヒロインたちに比べれば大分悲観的な子になってしまい、それがかなり姉から不評でした。

姉曰く、「橘は自分で何も解決しようとしていない」とのこと。ふむふむと思い、次からはもっと自発的な主人公にしようと考えた次第であります。

ではでは、最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございます。ました。

ご感想、評価、アドバイス、駄目だしなど、ご協力よろしくお願ひ致します。

ご感想は、ユーザー未登録の方でも書き込み可能となっておりますので、一言でも二言でも書き込んでいただけると幸いです。

最後になりましたが、本当にありがとうございました。
これからも、木村よしとその作品たちを暖かく見守ってください。

木村よし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1689n/>

ごめんねの代わりに

2010年10月8日14時28分発行